

# 義足考1964

— 傷痍軍人と義足モデルの接点 —

## 木下直之氏

神奈川大学日本常民文化研究所 所員

国際日本学部 特任教授

日時：2020年11月18日(水)17:30～19:00

会場：Zoomミーティング 【開場：17:15】

申込方法：11月16日(月)12:00までに、ご氏名とご所属を明記し、[jomin-kenkyukai@kanagawa-u.ac.jp](mailto:jomin-kenkyukai@kanagawa-u.ac.jp)までメールをお送りください。追って参加ID/PWを送信いたします。

# 義足考1964

## — 傷痍軍人と義足モデルの接点 —

- 日清・日露戦争の義足装着者（義肢拝受者、当時は廃兵、のちに傷痍軍人）と現代の義足装着者（義足モデル、最新の表現で切断ヴィーナス）のそれぞれの表象を追いかけ、比較する中で、両者の接点として、1964年のパラリンピック東京大会が浮かび上がってきた。傷痍軍人は戦前期には「白衣の勇士」と讃えられ、敗戦を境に「白衣募金者」と称される者を数多く出した。日本傷痍軍人会は白衣募金者一掃運動を展開するが、その際にオリンピック東京大会を一掃の目標時期とした。しかし、同時に開催されたパラリンピックには傷痍軍人も参加し、日本における障害者スポーツの出発点となった。障害者スポーツ（現代ではパラスポーツとも）の興隆が追い風となり、義足モデルの活躍の場が広がっている。昨年、義足のバービー人形が発売されたことは、急速に進む義足の可視化を象徴している。この現実をどのような観点（歴史学？民俗学？）なら整理できるだろうか。